「日本におけるオーラルインタープリティションの導入について」

上　田　依　子

I

オーラルインタープリティションとは，英語の Oral Interpretation of Literature の通称であり，日本語では「文学作品音声英語表現法」[1] または「文学作品の音声表現」[2] と呼ぶのが適切であろう。分りやすく云えば「朗読」という語を用いることも出来るが，オーラルインタープリティションには，普通に「朗読」という語から想像する以上のものが含まれているのである。「オーラルインタープリティションとは何か？」については，既に拙稿「Oral Interpretation of Literature について」(平安女学院短大英学会「英学」3号)において述べたが，今一度，手元にある参考書から，その特徴を述べているものをいくつか拾ってみた。[3]

> Interpretation is the art of communicating to audience a work of literary art in its intellectual, emotional, and aesthetic entirety.[4]

> Oral interpretation is the art of re-creating literary work (prose fiction, poetry, drama) through the medium of oral reading by an interpreter to an audience. It is not acting, impersonation, mimicry, or pantomime, though at times it may embody elements of each of these arts. Beginning with the printed page, and proceeding through the person of the interpreter—his voice, body, hands, face, and eyes—oral interpretation re-creates for the listener the intent and accomplishment of the author in a unique way.[5]

> ...the term interpretation is used instead of *reading* to indicate and connote effective recreation of the black marks on the page. These two designations are often used interchangeably and quite acceptably by some who consider them synonymous in their denotative meaning, and perhaps they are. They do not, however, have the same connotation. Even the words *oral reading* do not imply the standard of effectiveness of *interpretation*. Unfortunately, oral reading can be dull and monotonous and yet seem satisfactory if the pronunciation of words is distinct and accurate so everyone can hear easily. In an interpretative performance, you should not be satisfied in calling off words as words, nor should you attempt to read passively or casually....you should seek thoughts and attitudes that represent the complex meaning of the writer—who is another interpreter of ideas.[6]

> *Interpretation* is a technique of criticism and pedagogy. It has been developed primarily in speech departments as a means of ensuring that the breath of life remains in a poem or story during the process of analysis. *Interpretation* is also designed to provide a means of exposing the power of those works of literary art which by their aesthetic bases do not fully reveal their force to a purely abstract intellectualization....interpretation adds to the usual page-oriented critical techniques the act of reading aloud as a central means of becoming aware of total passionate meaning (which we take to include a work's dramatic as well as its thematic, grammatic, lexicographic qualities).[7]

上の引用からも明らかなように，"oral interpretation" は，"oral reading" という言葉だけでは表現出来ない要素をもつ "communicative art" である。オーラルインタープリティションを成立させるためには，情報の送り手である「朗読者」(oral interpreter) と，情報の受けとり手である「聴衆」(audience)，及びその情報源である「文学作品」の三つが必要である。しかもこのコミュニケーションにおいて朗読者が主たる表現手段である声と身体全体を使って一勿論それは象徴的動作であるが一伝達しようとするものは，朗読している作品に対する朗読者の解釈であり，作者によって創造された経験や世界が，いわば朗読者自身の理解と解釈によって沪過されて再創造され，その再創造

を通じて朗読者と聴衆の双方が同時に朗読された文学作品に対する理解を深め，鑑賞するのである。

このような朗読術は，ヨーロッパにおいては古代ギリシャ，ローマ時代より存在し，中世には，キリスト教の伝導活動のために，伝導師や説教師の素養の一つとして重視された。しかし，オーラルインタープリティションがスピーチの一分野として再び脚光を浴び始めたのは，1920年頃からアメリカの大学においてスピーチ学科が発達し始めてからである。スピーチ学科の発達と共に，オーラルインタープリティションもその重要な一科目として急速に発達し，アメリカでの英語教員の資格取得に必須の科目となったのである。

しかし日本においては，英語教育にスピーチ教育を導入することについては，まだまだ関心は低いのではなかろうか？　このことは，大学の英語テキストのカタログをみても明らかであり，漸く最近になって，あちこちの出版社から英語スピーチのテキストが出版されるようになってきているのである。1969年に佐藤秀志教授が，アメリカの大学における外国人学生のための英語クラスを視察して，「これからの日本の英文科学生には，英語による discussion, debate が正規のコースでとり入れられるべきだと思った」[8] と述べておられたが，英会話熱の隆盛にもかかわらず，スピーチの導入については，あまり論議されていないように思えるのである。

そのような状況の中で，スピーチの中でも一般的でないオーラルインタープリティションの導入の問題をとり上げたのは，逆説的ではあるが，その強い文学性のためである。パブリックスピーキングやディベイトのように英作文を必要とするのではなくて，英語で書かれた文学作品を朗読の素材とするのであるから，英語英文学専攻の学生を対象とする専門科目の一つとして，あるいは劇論や詩論，及びその他の作品講読において導入される可能性も，導入されている可能性も強いわけである。しかし大学で英語，英米文学を担当している教員のうち，どれ位の人々がこのような文学作品へのアプローチ，文学的英語教育に関心を持っておられるだろうか？また，音声によるコミュニケーションを目的とする英語教育の一助として，このようなコースの導入は，どのように考えられているだろうか？

日本の英語教育におけるオーラルインタープリティションの導入の問題を考察しようとした時，筆者は上のような疑問に突き当ったのである。そこで，1973年5月中旬より6月にかけて，全国の大学の英語，英米文学科（あるいは英語，英米文学教室）に別表のアンケートを送り，大学レベルでのオーラルインタープリティションの導入状況を調査した。

オーラルインタープリティションに関するアンケート（該当するものに○印をおつけ下さい）

大学　　学部　　学科

1. 科目の設置について
   1. 設置される（　年より）週　回（一回　時間）
   2. 設置されていない
   3. 独立の科目として設置されていないが他の関連科目に含まれて教えられている（　年より）
2. 他の科目の中に含まれている場合
   1. 科目名　a スピーチ　b オーラルイングリッシュ　c 会話　d 英語音声学　e その他（科目名を御記入下さい　　）
   2. 授業時間数　週　回（一回　時間）
3. 担当者
   1. 外人教師
   2. 日本人教師によるもの
4. この科目の導入についての御意見があればお聞かせ下さい

Ⅱ

A．調査対象の大学抽出

調査対象を英語，英米文学科に限定したのは，前述の如く，オーラルインタープリティションの持つ強い文学性のためである。この科目が導入される可能性は，まず英語，英米文学科の専門科目としてであろう。また一般的にいって，新しい教授法はまずいわゆる英文科において導入され，その成果をみながらその後次第に教養英語にも導入されていく場合が多いのではないかと考えた。さらに，教養英語の中に導入されているにしても，スピーチという科目の一部としてであろうし，現状ではスピーチもまだあまり教養英語の種別の中に導入されていないであろうと考えた。

従って，英語，英米文学科といっても「英語年鑑」(研究社) の「英語，英米文学科の構成一覧」で網羅されているもの全てではなく，その中の英語，英米文学専攻課程のあるものを調査対象にした。また，同一大学でも英米文学科と外国語学科，あるいは，短期大学部の英語，英文科，あるいはまた，英語教員養成課程のある教育学部の英語科などは，それぞれの科を一単位としてアンケートを送付した。

大学抽出の資料には，「英語年鑑」(1972年度) 及び「全国大学職員録」「全国短大高専職員録」(広潤社，47年度版) を使用した。新設短大及び学科の増設，英語，英米文学課程の有無など両者を照合して出来るだけ正確を期したつもりであるが，不注意のため送付もれがあったかも知れない。余談ながらこの抽出作業は予想外に手間どり，大学での教養英語教育の問題と大学の機構のかかわり合いの問題を改めて感じずにはいられなかったことをつけ加えておきたい。(紙数の都合上，アンケート送付先の大学名は省略。)

B．アンケート設問上の不備

1. オーラルインタープリティションの定義が与えられていなかったこと。
定義がそえられていなかったために，回答の不正確さ，回答内容の信ぴょう性の問題が残っている。説明を付さなかった理由の一つは，何の説明もない場合，どの程度理解してもらえるだろうか？回答して頂けるだろうか？ということと，その結果，かえってこの科目の知名度とそれに対する関心度を知ることが出来るのではないかと考えたためであった。また，片仮名の表記のみの場合，「オーラルイングリッシュ」のように科目名として抵抗なくうけ入れられるであろうか？などとも考えたのであるが，やはり定義をそえて回答を求めるべきであった。
2. 設置年度を求める項目には，(昭和　年より) と年号を附して，設置対象学年との混同を防ぐべきであった。
3. 設置対象学年及び，必修，選択の区別を設問すべきだったこと。
4. 一回の授業時間の単位を「分」として質問すべきだったこと。
5. 「設置されていない」と「関連科目の中で教えられている」の区別が分りにくかったこと。
6. 「他の科目の中に含まれている場合」の各科目について，授業時間数及び担当者の区別を記載できるスペースを設けるべきだった。
7. 各大学において，オーラルインタープリティションが独立した科目で設置されている場合，その名称を記入する欄を設けるべきであった。そういう欄を設けていれば，定義ずけのないオーラルインタープリティションの回答の不備を，この点から補強できたかも知れなかった。

C．アンケート結果[9]

表1　回答率及び導入率　　(　　) の数字は同一大学を含めたもの

内訳 / 大学別	アンケート送付数	回答数	回答率	科目として設置	一部導入	設置されていない	導入率
四年制大学	154	88	57%	6	54(55)	28	39%
教育大学(教育学部)	50	24	48%	1	11(12)	12	24%
短期大学	124	57	46%	5	34	18	32%
計	328	169	52%	12	99	58	34%

表2　関連科目における一部導入の頻度数

科目名 / 大学別	スピーチ	オーラルイングリッシュ	英会話	英語音声学	その他
四年制大学	6(7)	10	38	17	18
教育大学(教育学部)	0	3	9	9	5
短期大学	2	16	19	8	10
計	8(9)	29	66	34	33

表3　独立した科目として設置されている大学（四年制大学，短大順，アルファベット順）

大学名	設置年度	週回数	一回の授業時間	担当者		備考
				外人教師	日本人教師	
同志社大学	1968	1	90分		○	担当者は留学経験のあるもの
神戸女子大学		1	2時間		○	一学年より

大妻女子大学	1969	1	90分		○	自由選択科目，三学年より 天野一夫教授担当
成蹊大学	1973	1	90分	○		
四国学院大学		2	45分		○	一学年より
白百合女子大学		1	90分	○	○	
京都教育大学	1951	1	2時間	○		Edwin O. Payne 教授担当
平安女学院短大	1970	1	90分		○	二年生対象　自由選択科目，名称「演習」
北星学園女子短大		1	2時間	○		
純真女子短大		2	90分	○	○	一年及び二年生
椙山女学園大学 短期大学部	1968	2	45分	○	○	一年より
帝塚山学院短大		3	90分	○		一年より
同志社女子大学	1974	1	90分	○		三年より，名称「英語表現研究」

表4　関連科目において一部導入されている大学（四年制大学，教育大学(学部）短大順，アルファベット順）

大学名	一部導入の関連諸科目					週回数	一回の授業時間	担当者		備考
	スピーチ	オーラルイングリッシュ	英会話	英語音声学	その他			外人教師	日本人教師	
青山学院大学	○	○			アドヴァンスドスピーチ	(各々)1	90分	○	○	1949年より
跡見学園女子大学		○		○		(各々)1	90分	○	○	一年生のオーラルは必修 二年，三年は自由科目
別府大学				○				○		二年生より
中京大学			○			2	90分	○		一年より
愛媛大学			○		英作文	2	100分	○		1955年より
英知大学			○	○		1	100分	○		
藤女子大学			○	○				○	○	
福岡大学		○	○			1	2時間	○	○	一年より
福岡女子大学			○			1	2時間	○		一，二年
学習院大学	○					1	100分		○	
岐阜女子大学				○		1	2時間		○	三年より
弘前大学			○			1	2時間	○		1949年より
弘前学院大学			○			2	50分	○		
法政大学					文学演習	1	2時間	○	○	
茨城キリスト教大学	○					1	2時間	○		
実践女子大学			○			2	90分	○		
上智大学					プロゼミ	2	2時間	○		一年より
神奈川大学			○	○	表現演習	2	90分	○	○	日本人教師は英語音声学を担当

大学名	一部導入の関連諸科目					週回数	一回の授業時間	担当者		備考
	スピーチ	オーラルイングリッシュ	英会話	英語音声学	その他			外人教師	日本人教師	
関西学院大学			○		英語特講英作文	数回		○	○	
金城学院大学			○	○		3	90分	○	○	
北九州大学(文学部)					第一外国語(英語)B				○	1973年より教師の個人的興味で一部導入
神戸大学			○		英米文学講読 英米文学演習			○		
神戸女学院大学		○				2	50分	○		
甲南女子大学		○	○	○		3	2時間	○	○	
共立女子大学			○			1	90分	○	○	
京都大学			○			2	90分	○		
京都女子大学			○			1	90分	○		
京都産業大学			○	○	外人実習	3	90分	○	○	英語音声学は日本人担当
九州大学			○			1	2時間	○		
九州女子大学			○		時事英語実用会話※	1	90分	○	○	※他に，英米風物誌 英作文などで導入
明星大学			○	○		1	2時間	○	○	
武庫川女子大学			○	○				○	○	Mr. B. L. Burke 藤原昇，池本明助教授
南山大学(文学部)			○			1	90分	○		英文科創設以来
南山大学(外国語学部)			○			3	90分	○		一年，二年1963年より
日本大学		○			スピーチコミュニケーションセミナー	1	90分		○	川島彪秀助教授担当 1969年より
日本女子大学	○					1	2時間	○		三年より
ノートルダム女子大学	○		○		講読など	1	90分	○		
ノートルダム清心女子大学										二年より 教師の自主的導入
大妻女子大学				○	英語発音法	1	90分		○	一年次必修
麗沢大学		○	○			3	90分	○		一年，二年次に履修
立正大学			○			1	85分	○	○	
立命館大学			○			1	90分	○		一年，二年必修
西南学院大学(英文科)	○		○	○						
西南学院大学(外国語学科)	○		○							
信州大学					スピーチアンドライティング	2	2時間	○		1972年より設置

大学名	一部導入の関連諸科目					週回数	一回の授業時間	担当者		備考
	スピーチ	オーラルイングリッシュ	英会話	英語音声学	その他			外人教師	日本人教師	
静岡大学			○			1	100分	○		
静岡女子大学			○			1.5	3.5時間	○		
玉川大学		○		○		3	90分	○	○	1963年より
東北学院大学					LL	1	90分		○	
東京大学			○		英作文	1	2時間	○		1955年頃より
津田塾大学			○		講読A	(各々)1	2時間	○	○	一年より
都留文科大学		○	○			2	90分	○	○	
早稲田大学			○	○		(各々)1	90分	○	○	英語音声学は日本人教師
和洋女子大学			○	○	英作文	1	90分	○	○	
安田女子大学		○	○	○		2	1時間	○	○	
愛知教育大学			○	○	英文学	1	100分	○	○	一年より
愛媛大学 教育学部			○	○	LL	1	100分	○	○	二年より 外人教師は会話のみ
福島大学 教育学部		○	○	○	一般英語	1	95分	○	○	1966年より 外人は会話，オーラルイングリッシュ
群馬大学 教育学部			○	○		3	2時間	○	○	外人は会話(2回)
弘前大学 教育学部		○				1	90分		○	三年より
京都教育大学					英作文 発音	2	2時間	○		1951年より E. O. Payne 教授担当
宮崎大学 教育学部				○		1	100分		○	
新潟大学 教育学部		○	○	○		4	2時間	○	○	1960年より
佐賀大学 教育学部			○		イングリッシュイントネーション	2	2時間	○	○	
滋賀大学 教育学部			○	○		2	2時間	○		
鳥取大学 教育学部			○	○		2	100分	○	○	
山形大学 教育学部			○	○		2	2時間		○	
愛知淑徳短大		○	○			2	90分	○	○	1967年より
青森明の星短大		○				3	50分	○		
中国短大			○		作文 Reding I	5	90分	○	○	一年より
福岡女学院短大					通訳演習	1	2時間	○	○	1971年より
学習院女子短大					英語演習 LL					
岩国短大		○							○	
神奈川県立 外語短大			○		英作文，商英，論文講読	4	90分	○	○	R. Bozulich, J. Paries, 奥田晴郎, 竹内秀雄, 高崎修 氏ら

大学名	一部導入の関連諸科目					週回数	一回の授業時間	担当者		備考
	スピーチ	オーラルイングリッシュ	英会話	英語音声学	その他			外人教師	日本人教師	
関東短大		○				1	90分	○	○	
カリタス女子短大		○				4	2時間	○		一年より
川村短大			○			2	90分	○		1963年より
賢明女子学院短大			○			6	50分	○		一年より
県立新潟女子短大		○		○	LL，演習	3	1.3時間	○	○	1966年より
近畿大学青踏女子短大					LL	1	2時間		○	1972年より
京都女子大学短期大学部			○			1	90分	○		
京都精華短大		○	○	○		4	45分	○	○	1969年より
九州女子短大			○		英作文実用英語	1	90分	○	○	
武庫川女子短大			○	○						武庫川女子大学参照のこと
長野県短大			○			1	90分	○		
名古屋自由学院短大		○		○		2	90分		○	一年より
ノートルダム清心女子短大		○				3	50分	○		
大妻女子大学短期大学部				○	英語発音法	1	90分		○	英語発音法，一年必修英語音声学一，二年選択
立教女学院短大	○	○				4	90分	○	○	日本人教師はオーラルイングリッシュの一部のみ
三育学院短大	○	○			コミュニケーションプラクティカム	2	50分	○		1971年より
西南女学院短大		○				2	100分	○		
帝塚山短大			○			1	90分	○	○	1963年より
戸板女子短大					LL英語	1	90分	○	○	1967年より
東海学園女子短大			○	○		1	90分		○	一年より，LLを使用
常葉女子短大			○			1	2時間	○		一年より
東京女子短期大学部			○			2	1時間	○		
苫小牧駒沢短大		○	○	○		2	90分	○	○	英語音声学は一年より日本人担当
鳥取女子短大			○			4	95分	○		1971年より，Mrs. Powers，一年より，Mr. Vilwilgen 担当
宇部短大		○	○			2	2時間	○	○	
(名称不明)(東京)		○	○	○		1	90分	○	○	1940年より
(名称不明)(福島)		○	○			5	1時間	○	○	

D．アンケート結果（表1，2，3，4）についての考察

1.「設問上の不備」でふれたように，まず最初にオーラルインタープリティションの定義がそえられてい

なかったために，各表の数字は，わが国における大学レベルでのオーラルインタープリティションの導入状況を正確に把握したものとはいえない。各表は，この名称に対して，いくつか違った理解がなされたことを前提にして，参考資料として考えるべき性質のものである。

2. 本稿の最初にあげたオーラルインタープリティションの定義と異なる解釈としては，“英語で行なわれる講義”において，“与えられた英文あるいは，質問の解答，説明を英語で口頭を行なうこと”の意味に理解されて回答が与えられた場合が多かったのではないか，と考えられる。それは oral composition ともいえるから，英作文，ＬＬで一部導入されているという回答とも一致するわけである。

3. 教育大学（教育学部）を別に扱ったのは，「オーラルインタープリティションを英語教員資格取得のための専門必修科目として導入すべきではないか」との筆者の考えに基づいている。大学レベルでの口頭での英語表現能力の基礎を作り上げるためには，中学，高校英語における効果的な oral reading の導入が必要ではないだろうか？そのためには，特に，将来英語教育にたずさわろうという熱意に燃える学生のために設置されている教育大学や教育学部英語科における担当者の関心やカリキュラムの方向についても現状を把握したいと考えたのである。導入率は24％であるが，後述する如く，教育大学及び教育学部では，この科目の重要性を認め，設置に積極的な賛成の声も多い。

4. 四年制大学の57％というかなり高い回答率は，文学批評，文学鑑賞の一手段としてのこの科目に対する関心の高さを示しているといえるであろうか？四年制大学においては，一部導入の関連科目の内容（―スピーチ，英語音声学の多いこと，及びその他の項目で挙げられている科目名からも推察できるが）―から判断しても，オーラルインタープリティションという名称の内容も，筆者の意図した意味で理解された場合が比較的多かったとも考えられる。青山学院大学では *Advanced Speech* という科目も設けられており，*Speech Communication Seminar*（日大），*Speech and Writing*（信州大）など，スピーチの一分野としてオーラルインタープリティションが教えられている例も多い。また「プロゼミ」（上智大），「表現演習」（神奈川大），「文学演習」（法政大），「英米文学演習」（神戸大）など，「演習」という名称で設置されている専門科目の中で一部導入されている場合も多く[10]，殊に文学演習の場合は，文学研究の一つのアプローチとして導入されていることは確かであろう。

5. 短大の回答率46％，導入率32％はどのように解釈すべきであろうか？表2にも明らかな如く，短大ではオーラルイングリッシュ，英会話での一部導入が多くて，スピーチが少ない。これは短大生の学力では，英語でのスピーチは難しく，スピーチという科目自体の導入については，英会話，オーラルイングリッシュの導入ほどには関心がもたれないためかも知れない。しかしその中で，三育学院に「Communication Practicum」という科目が設置されているのは，注目すべきことである。

6. 日本の大学におけるオーラルインタープリティション導入の最も古い例は，筆者の知りえた限りでは，1949年青山学院大において，“English Intonation”という科目の中で導入されたものである。しかし，カリキュラムの中で，独立して一つの科目として最初に設置されたのは，1951年，京都教育大学において Edwin O. Payne 教授によって設置された「朗読法」であろう。それ以来，同大学では Payne 教授によって，ずっと「朗読法」という名称でオーラルインタープリティションが教えられてきている。その後，1968年前後より，僅かではあるが独立した科目として，あちこちの大学で少しづつ導入され始め，今後も徐々に科目としての設置が増加していく傾向が窮われる。

7. 一方，課外活動としては，1964年より，青山学院大学スピーチクリニック部門主催，日本大学助教授川島彪秀指導の下に“The National Intercollegiate Contest in the Oral Interpretation of Literature”が行なわれている。[11] 日本大学では英文科主催による“Annual Oral Interpretation Contest”が，1971年より行なわれており，金蘭短期大学でも一年に一度，“Oral Interpretation Contest”が行なわれている。大妻女子大学及び短期大学部の課外活動もめざましい。（後述の「大妻女子大学での成果」を参照されたい。）平安女学院短大では，1970年度より年一回の学生研究発表会において，オーラルインタープリティションを履修している学生による発表も行なってきた。学生達の自主的な判断によって発表会用にとり上げられた作品は（勿論各作品のごく一部であるが），1970年度は *Good-bye, Mr. Chips*，及び *Our Town*，1971年度は，*Christmas Carol*，*The Diary of a Young Girl*，*Merchant of*

Venice, 1972年度は，*Annabel Lee*, *After Twenty Years*, *All My Sons* などである。1972年秋には，E. S. S. 学生が，従来の英語劇上演の代りに，朗読劇(Readers Theatre)を試み，"The Song Caruso Sang"[12] を発表した。その朗読は，数個の腰掛けとわずかの照明効果だけで聴衆をひきつけ，英会話担当の外人教師は英語学習の方法として，従来の英語劇上演よりも秀れており，参加学生の英語力がぐんと伸びたと評価していた。

Ⅲ

A．導入についての諸意見

表1にも明らかなごとく，全く初めての試みだったこのアンケートに対して，328校のうち169校，全体として52%の回答が寄せられたことは感謝にたえない。しかも169校のうち，50名近くの先生方が何らかの意見，詳細な指導法を書きそえて下さっていた。この紙上を借りて，御協力に御礼申上げたい。そこで，次に，この科目の導入に関して，それらの意見を紹介させて頂くこととする。[13](大学種別，アルファベット順)

1. 四年制大学

「この種科目は時宜に適するものと考え，当方でも設置計画中。一つには適材にめぐり合わない（のも問題）。」(愛知大学池田正氏)

「Readers Theatre ならば，マスプロ授業にも導入出来ると思う。」(青山学院大学鈴鹿勉氏)

「将来設置したいと希望。」(跡見学園女子大学上野利雄氏)

「学生数が多過ぎて充分の効果が上らない。」(中京大学英文学科)

「内容の理解を伴なった英語の表現のために大切である。」(同志社女子大学小田幸信氏)

「近い将来授業の中に正規に採り入れたいと考えている。」(藤女子大学英文学科)

「筑波大学に新設計画ありと聞く語学センターなどにこの科目が設置され，全国大学のモデルとして一般化されるよう英語教師は積極的に動いたらよいと思う。」(岐阜女子大学岩田良美氏)

「この科目は非常に重要でぜひ導入しなければならないと考えているが，本学では独立の科目として設置するにはまだしばらくかかる。」(弘前大学下宮忠雄氏)

「日本の英学生はこれに弱いから，良い外人教師を迎えて強力に勉強をさせるべきである。」(茨城キリスト教大学山口駒夫氏)

「日本の大学で実用的英会話教育をより高めていく過程の中で，従来の非実用的外国文学教育との接点として重要と思う。」(北九州大学吉崎泰博氏)

「英語，英文学専攻の学生（特に英語教師を希望する者）にとり重要な科目の一つですが，現在カリキュラムの関係，又指導者がいないこと等の理由で設置していないのは残念である。将来日本の大学にこのような科目が設置されることに大賛成です。」(北九州大学小嶺幸祺氏)

「重要性は認めるがスタッフその他の関係で実現出来ない。この問題をよりＰＲして頂きたい。」(鹿児島大学英文学科)

「Speech か Oral English の特別の学科目をおき，組織的に実施するのが望ましい。」(武庫川女子大学橘正観氏)

「今後そういう科目の導入も必要と思う。」(東北大学英文学科)

「オーラルインタープリティションの概念規定が不明であるので，現段階では独立科目として考える動きは見られない。」(東北学院大学英文学科)

「学生の実力から判断して，どの学年から始めればよいかが問題となる。」(都留文科大学英文学科)

「数年前に設置提案を試みたが，時期尚早とのことで現在に至っている。」(鶴見大学中村氏)

2. 教育大学（教育学部）

「米国における Speech 教育の中で，日本の中，高，大の英語教育に現在最も欠けているが行なって有意義なものは oral interpretation だと考える。教師教育を行なう学部として必要かつ重要な科目として設置を将来考えたい。」(愛媛大学教育学部英語科金田道和氏)

「本学では残念ながら確立されていないが，外国語教育の中で是非とりあげたい分野だと思う。」(福岡教育大学英語英文学研究室)

「一般英語の訳読に代るものとして，Listening Interpretation の教材開発が望まれる。」(福島大学教育学部英語科西村嘉太郎氏)

「教育学部では必須と思わないが，短大，外大等の英語科では是非導入すればよい。」(弘前大学教育学部織谷馨氏)

「こんな科目が将来開かれることは望ましい。」(高知大学教育学部英語科)

「この種の英語教育は，もっと早い時期に行なうべきと思うが，現状では少し無理であろう。将来中学あるいは高校で英語を教える者は，少なくともこのような訓練が必要と思う。」(宮崎大学教育学部英語科)

「いいとは思うが種々の事情により実現できていない。」(岡山大学教育学部英語科)

「音声学，会話，作品講読の中ででも取り上げていくべきだと思う。」(富山大学教育学部英語科)

3. 短期大学

「必要だと思うが適当な教官がいない。」(鹿児島県立短期大学英文科)

「正規のカリキュラムに入れたいが，まだ入ってはいない。」(金蘭短期大学英文科)

「現在多少取り入れているが，学生の英語能力を増進させる重要な教科と思われるので，出来るだけ早い機会に独立の科目として設置したい。」(日本基督教短期大学英文科)

「日本で生れ日本で育ち，寝ても醒めても日本語でしゃべっている我々日本人にとって，oral interpretation は難事中の難事。」「英語をしゃべる」こと以上に「英語を聞いてわかる」ことは難しい。patienceを以って constant practice させる以外に方法はない。」(帝塚山短大英米文芸学科)

「かつての英語教育で oral method, oral approach, direct method の definition の明確度が弁別できなかったように，oral interpretation と oral English との区別をはっきり科目で区別できるだろうか。」(戸板女子短期大学)

「reproduction から進んで interpretation まで出来るようにするには，中等教育の英語がもっと変えられる必要があると思う。production を重視するという方向には大賛成である。」(東京女子大学短期大学部升川潔氏)

福岡大学の田所信成教授は，以前よりスピーチの導入に関心をもって居られた一人である。氏の「E. Caldwell の "A Very Late Spring について—語学教材と文学教材—」(福岡大学「人文論叢」第1巻第3号1970年3月)は，オーラルインタープリティションの方向での英語教育の試みであり，氏の「いわゆる "Reading" における "Speaking" の要素—Speech への道—」(福岡大学「人文論叢」第4巻第4号1973年3月)及び「英語における "ordinary vore"」(第12回 LLA 全国大会での報告)などの論文にみられるように，英語教育における発声法の問題に研究を進めておられる。日本人学生を対象とする英語のスピーチ，とりわけオーラルインタープリティションには，声，"voice training" の問題は重要であり，数少ない貴重な研究であろう。

B．大妻女子大学での成果

日本人学生を対象とする英語スピーチの指導には，スピーチの専門的知識とスピーチ技術の訓練を受けているだけではなく，英語音声学の知識，及び理想的に云えば，当然スピーチクリニックの能力も必要である。オーラルインタープリティションの指導には，以上挙げたものの他に文学作品についての専門的知識も欠かせない。すなわち，日本人学生を対象としてオーラルインタープリティションの指導をしようとすると，英語音声学，スピーチ，文学研究のの三つ分野についての素養が必要であり，日本人教師がこの科目の指導を行なうのは無理であるという悲観的な見方も成り立つかも知れない。しかし英会話とはちがって，native speaker だからといって必ずしもオーラルインタープリティションを教えられるとは限らないのである。外人教師であっても，文学作品の鑑賞を好みスピーチにも関心をもつ人でなければこの科目を教えようとしないであろう。

教師にとってこのように困難なものであるならば，ましてそれよりも英語の学力が充分ではない学生がオーラルインタープリティションを行なうことは，不可能に近いのではないかとの疑問も生れるであろう。しかし，設置対象学年とその学年の学生の学力に応じた作品の選択によって，日本人教師の指導による日本人学生のオーラルインタープリティションは不可能ではない。文学作品の理解と鑑賞を好むと同時に，テープレコーダーやＬＬ，ラジオ，テレビでの英会話などの発達によって，英語での口頭によるコミュニケーションに関心をもち，口頭表現力を磨きたいと願う学生にとって，オーラルインタープリティションは，challegning な科目なのである。

そこで最後に，日本人教師によって日本人学生を対象とし，英文科の専門科目としてこの科目が教えられ，すばらしい成果を収めている例を紹介したい。

大妻女子大学では，英文科三，四年生を対象とする自由選択科目として，「文学作品の音声表現」という講義名で1969年からこの科目が天野一夫教授によって教えられている。しかし，三，四年次におけるこの科目の履修には，その前提条件として「英語発音法」が学部，短大ともに英文科の第一学年度における必修科目として設置されており，ここでまずオーラルインタープリティションが一部導入される。次に二年次における自由選択科目として「英語音声学」があり，そこでも一部導入が行なわれている。従って三，四年生のためのオーラルインタープリティションは，英語音声学の知識をもち，音声面の訓練をうけ既にオーラルインタープリティションの手ほどきをうけた学生を対象として行なわれているといえるのであり，テキストには，Geoffery Crump; *Speaking Poetry* 及びQuiller-Couch ; *The Oxford Book of English Verse* が使用されている。

このように周到に練られたカリキュラムの中で行なわれているオーラルインタープリティションの教授は，

Otsuma Review に発表されている卒論の縮刷版からも窮えるように，アメリカのスピーチ学科の三，四年及び大学院学生を対象とする "Oral Interpretation of Poetry" などのコースに比肩するものであろうと思われる。文学作品の音声表現研究を卒業論文のテーマにした学生は45年度1名，46年度2名，47年度5名と年毎に増加している。1971年度の "A Study of Oral Interpretation in English Poetry" は，Yeats の二つの詩をオーラルインタープリティションの立場から研究したものである。一つは，Cyril Cusack による "The Wild Swans at Coole" の朗読テープを，intonation, stress, pause, tempo の面から一音節毎，一行毎に測定分析し，朗読者の解釈を音声学的に考察したものである。そのために，研究者自身による音声記号も考案されている。他の詩 "The Song of Wandering Aengus" については，オーラルインタープリティションに必要な文学研究を行ない，この詩のオーラルインタープリティションを行なうに当って必要な音声学上の問題点を考察している。[14]

1972年の "*'Adonais' by P. B. Shelly—An Attempt at Oral Interpretation*" も上の論文と同様，intonation, stress, pause, tempo の四つについて *Adonais* の朗読テープを音声学的に分析したものである。しかしこの場合は，Gary Watson, Margretta Scott, Robert Speaight の三人の優れた朗読者による同一詩の朗読の比較分析である。この論文においても研究者自身の考案による音声記号が用いられており，大妻女子大学においてオーラルインタープリティションのために行なわれている英語音声学の高度な基礎学力に驚かずにはいられない。

1973年の「Choral Speech による "The Pied Piper of Hamelin" by R. Browning の研究」は，"The Pied Piper of Hamelin" を研究者が Choral Speech 用にアレンジし，学友と共に練習を重ねて公開朗読し，その公開朗読テープを音声学的に分析考察したものである。劇を素材とするグループによるオーラルインタープリティションは，比較的容易であるが，詩の朗読，まして，日本人学生による choral speech は野心的な試みであり，そのために費やされた努力と時間とは並大抵のものではなかっただろうと思われる。

以上のような優れた論文は，カリキュラムの上だけではなく，物質的な面における教育，研究体制の充実によって可能となっているのである。大妻女子大学の視聴覚センターには，英米の文学作品の朗読レコードが300枚以上備えられており，それらは全てテープに録音されて，①レコード会社別，②作者，作品別，③作者，朗読者別の索引カードによって学生達の利用を容易にしているという。

正規のカリキュラムにおける物心両面ともいえるこの行届いた教育に比例して，オーラルインタープリティションの学習を目的とした学生の課外活動も盛んである。学部，短大学生による The Minerva Society, 教養部学生による Spoken English Society の二つのクラブが，毎年それぞれオーラルインタープリティションの発表会を開催し，各発表会のビデオテープも保存されているとのことである。

以上のようなた大妻女子大学におけるオーラルインタープリティションの教育は，この科目を英語，英米文学専攻の学生を対象として導入することが決して不可能ではなく，"constant practice", "hard work", "patience" をいとわなければ指導しようとする教師にとっても，また履修しようとする学生にとっても，英語を身近かに感じるようになれる "rewarding" な科目であることを教えてくれるのである。

（本稿は，1973年8月8日，太平洋コミュニケーション学会夏期研究会における報告原稿を加筆補正したものである。資料整理の方法を一部変更したため，研究会において使用した資料に示された数字と若干変更のある部分があることをお断りしておきたい。）

〔註〕

1) 日大助教授川島彪秀氏による呼称。Cf. J. W. Wagner & T. Kawashima, *Essentials of Effective Speaking* (Tokyo: Nan'undo Pub., 1970), p. 120.
2) 大妻女子大学天野一夫教授による科目名としての呼称。
3) 他に短大レベルの学生でも分りやすく，しかも簡潔に研究法を述べたものに，Mulgrave, Dorothy. *Speech.* New York: Barnes & Noble, Inc., 1954. pp. 100-114. がある。川島氏の同上書(p. 38 & p. 46) および，*A Modern Handbook of Speech.* Tokyo: Aoyama Service, Publishers, 1970. pp. 122-124. においても，簡単に説明されている。
4) Charlotte Lee, *Oral Interpretation* (Boston: Houghton Mittlin, 1965), p. 3.
5) Jere Veilleux, *Oral Interpretation: The Re-Creation of Literature* (New York: Haper & Row, 1967), p. 1.
6) Charles H. Woolbert & Severina E. Nelson, *The Art of Interpretative Speech* (New York: Appleton-Century-Crofts, 1968), p. 8.
7) Robert Beloof, *The Performing Voice in*

Literature (Boston: Little, Brown and Company, 1966), p. vii.

8) 佐藤秀志「外国人のための Advanced Class」(「現代英語教育」Vol. 6, No. 8 (Nov. 1969), p. 49.

9) ① 回答資料の整理に当って，時として筆者の判断により与えられた回答と違う処理を行なった場合がある。「設置」と回答されていても，その後に附された内容から「一部導入」に該当すると判断したり（例えば中京大の場合），逆に「設置していない」と回答されていても，「一部導入」に入れた場合もある（西南学院大学の場合など）。また，長崎県立外語短大の場合，口頭で英語を「逐次通訳」するコースであることを詳細に記して頂いていたため，「設置していない」に該当すると判断して整理した。しかし一方では「通訳演習」（福岡女学院短大）は内容が具体的に分らないため残している。「定義不詳」を指摘して頂いた回答の中にも，その他の説明内容から，「一部導入」として処理したものと，「設置されていない」に処理したものとがある。アンケートに御協力頂いた先生方が，以上の回答資料の扱い方に異議，御不満を持たれる場合も多いかと思われる。誤りを指摘して頂ければ幸いである。
② 導入率は，アンケート送付校全体に対する導入率である。回答数の中の導入率ではない。
③ 表 4 の一週当りの授業回数は，二つ以上の科目に回答の印がつけられている場合，"各" となければ，推測して頂く他はない。同様に，一回の授業時間も時として不明確であった。各大学によって「1時間」は何分に決められているか分らないため，1時間，2時間は回答通りに記載し，「1.5時間」の記載のみ，90分として記入した。

10) 平安女学院短大における科目としての設置も英文科専門科目の中の演習の一つとしてであるが，一部導入ではなく，独立した一つの科目として扱われているため，「独立した科目として設置」の中に入れたのである。

11) Takehide Kawashima & Wayne H. Oxford, "Speech Education in Japan", *International Studies of National Speech Education Systems*, ed. by Fred Casmir & L. S. Harms (Minneapolis, Minn.: Burgess Publishing Company, 1970), p. 122.

12) George P. McCallum, "The Song Caruso Song", adapted for Readers Theatre by the author in Leslie Irene Coger & Melvin R. White, *Readers Theatre Handbook* (Glenview, Ill.: Scott, Foresman and Company, 1967), pp. 198-209.

13)「……ございます」等の表現は，簡単にしてある。

14) 小池ツヤ "*A Study of Oral Interpretation in English Poetry* "*Otsuma Review*, No. 3 (Mar. 1971), pp. 47-61.

15) 岡本美恵子 "'*Adonais*' *by P. B. Shelly—An Attempt at Oral Interpretation*", *Otsuma Review*, No. 4, (Mar. 1972) pp. 75-85.

16) 加藤千春「Choral Speech による "The Pied Piper of Hamelin" by R. Browning の研究」*Otsuma Review*, No. 5 (Mar. 1973), pp. 86-103,